

四面斗絶人跡希至、昔日深草聖皇明仁令建一精舍修藥師念佛三修居止以降、歲月漸積堂舍有數、誠非雲構庶幾靈山、望請天慈賜預定額、故從其所請。

〔帝王編年記十元正〕養老七年癸亥下云、古老傳曰、○中霜速比古命之男、多々美比古命是謂夷服岳神也、女須佐志比女命、是夷服岳神之姪、在久惠峯也、次淺井比咩命是夷服神之姪、在於淺井岡也、是夷服岳與淺井岳相競長高、淺井岡一夜增高、夷服岳怒拔刀劍殺淺井比賣之頸、墮江中而成江島、名竹生島其頭乎、

〔一宵話三〕龍之雲 高山へ登り、風雨雲霧の變に逢ふも、此海上の事に似よりしものなり、昔年高元泰が輩日向の霧島山高千穂峯に登り、彼逆鉾の邊に至りしかば、俄に山鳴り雲起り、面前真黒になり、おそろしといふもおろか也、青木主計頭長崎祠官也のいつの間に用意しけん、袖より粟粒の類を取出し、疾風急雨に打向ひ、投かけくせしかば、やがて風靜まり、雲晴たり、これは彼天孫の昔を思ひよれるか、白石先生有記いづこの山も、高山はかかる事有るものなり、心得すべし、此邊にても美濃國惠那郡惠那山は、國中第一の高山なり、此山の祭りに郡中の村々より馬を引て登る事也、其日には必大風雨する、是を土人の説に、大勢が登り、二便して御山を穢すから、神きたなくおぼして、洗ひ淨め給ふ雨なりと云ふ、是は神の御心とも覺へず、穢はしとおぼさば、祭うけ玉はぬがよし、客を請じて客の座敷よごせるを腹立るは好主人にはあらず、まして終日山中に居て、二便せぬものはある、おもふに深山窮谷中に鬱蒸積充する雲霧濕氣、數萬人の聲にひき動かされて、俄にさわぎ起るものならんかと、或人いへり、此モ亦理あり、

〔飛州志一土地〕嶽 騎鞍嶽、高山國府ヨリ辰ニ當ル、同郡阿多野郷、阿多野郷村、野麥村、大野郡小八賀郷、池俣村、岩井村、吉城郡高原郷、平湯村等ノ山々、此嶽ニ接ス、後ハ信州ノ界也、
〔飛州志三神祠〕騎鞍權現